

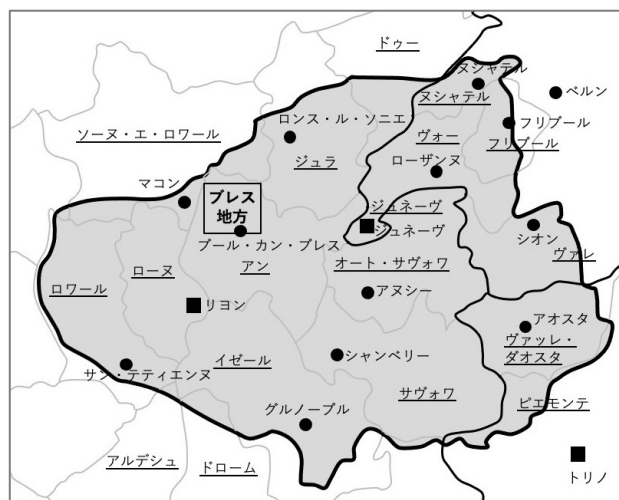
ブレス地方におけるフランコプロヴァンス語の再活性化

佐野 彩

1. はじめに—フランコプロヴァンス語とブレス地方

1.1. フランコプロヴァンス語

本稿は、フランコプロヴァンス語圏の一部を成すフランスのブレス地方 (Bresse) におけるフランコプロヴァンス語 (francoprovençal) の再活性化について、言語状況の変遷と言語運動の展開を検討し、考察するものである。フランコプロヴァンス語は、主にフランス、イタリア、スイスの国境をまたぐ地域で使われてきたロマンス語である。図1に示されているように、フランスでは南東部のサヴォワ地方やリヨン周辺の主にオーヴェルニュ・ローヌ・アルプ地域圏に含まれる地域、イタリアではフランス、スイスと国境を接するヴァッレ・ダオスタ特別自治州、さらにピエモンテ州の一部¹、スイスではジュラ州を除くフランス語圏がフランコプロヴァンス語圏に含まれる。フランコプロヴァンス語圏は、三つの国の国境が交わる山岳地域を中心に、比較的広範囲に広がっている。

図1：フランコプロヴァンス語圏²

フランコプロヴァンス語は、19世紀後半にイタリアの言語学者アスコリによって、オイル語とオック語の移行地域にその存在が提示され、「フランコ・プロヴァンス語 (franco-provenzale)」と名づけられた言語である (Ascoli [1874] 1878: 61)。「フランコプロヴァンス語」の言語境界は二つの音韻的特徴によって引かれ³、その言語境界によって切り取られた「フランコプロヴァンス語」圏には、全体として歴史・社会的一体性がない。ヴァッレ・ダオスタやサヴォワのように、それぞれに歴史・社会的一体性があり、人々にその一体性が意識される複数の地域を内包している。そしてこの言語を話す話者

¹ イタリアではほかに、南部のプーリア州にも二つのフランコプロヴァンス語の村がある。

² Bert et al. (2009) p.14 に掲載されている地図をもとに作成した。

³ オイル諸語とは語末無強勢母音があることによって、オクシタン語とはラテン語母音 A が口蓋子音に続く場合に見られる口蓋化によって区別される。

は概して、自分の言語を自分の暮らす村やその周辺の限られた範囲の地域的なことばを指す「パトワ (patois)」と認識し、そのように呼んできた。

フランコプロヴァンス語圏ではフランス語やイタリア語への言語シフトが進んでおり、フランコプロヴァンス語は厳しい状況にある。ユネスコの基準を用いた研究では、とりわけフランスとピエモンテ州における言語状況が厳しく、続いてスイス、最も状況が良好なのはヴァッレ・ダオスタ州であると査定されている (Zulato et al. 2018: 13)。そのヴァッレ・ダオスタ州の多くの地域に加えて、ピエモンテ州、サヴォワ地方、スイスのヴァレ州などのいくつかの山岳部の村などでは、フランコプロヴァンス語による日常的なやりとりが見られることがある (Bichurina 2018: 154–155 など)。しかし、大部分の地域ではフランコプロヴァンス語は地域社会における日常的なコミュニケーションで使われる言語ではなくなっている⁴。

その一方で、フランコプロヴァンス語圏でも言語運動が進められてきた。各地で、それぞれの地域の「パトワ」の記録や継承の活動が始まったが、1970 年代末頃から地方や国の境界を越える交流・連携が進展し、2000 年代には言語学的に定義されるフランコプロヴァンス語圏全体に広がった (佐野彩 2023: 147–155 など)。さらに、三つの国の比較的若い世代の運動家が参画する運動が 2000 年代半ば頃から活動を広げ、とりわけインターネット上で存在感を増した。彼らは“franco”と“provençal”を組み合わせた折衷的な学術的名称「フランコプロヴァンス語」に代わる「アルピタン語 (arpitan)」⁵という名称を前面に出し、三つの国にまたがる国境を越える言語であることを強調した。

フランコプロヴァンス語は、近年では三つの国で公的な認知も得られている。本稿で取り上げるフランスでは、1999 年に作成された「フランスの諸言語 (Les langues de France)」のリストに含められたものの、国民教育省には数十年にわたる認知要求運動にもかかわらず認知されていなかったが、2021 年に地域言語として認知された⁶。また、2009 年には旧ローヌ・アルプ地域圏でオクシタン語とともに地域言語として認知されており、地域語政策が推進されてきた。

⁴ なお、フランスの旧ローヌ・アルプ地域圏 (2016 年にオーヴェルニュ地域圏と合併) では、フランコプロヴァンス語を話することができる人は 2009 年の時点で約 5 万人であり、人口の 1 パーセント未満と推定されている (Bert & Martin 2013: 494)。

⁵ 「アルピタン語」は、1970 年代にヴァッレ・ダオスタで行われた左翼的な分離主義運動で用いられた名称に由来する。

⁶ 2021 年 5 月に公布された「地域諸言語の遺産としての保護と振興に関する法律」(モラック法) のイマージョン教育についての条文などが違憲であるとされたことを受け、同年 12 月に国民教育・青少年省通達が出されたが、そのなかで地域言語の一つに含められていた。背景には、フランスでのフランコプロヴァンス語の認知要求運動を牽引してきたサヴォワ地方の運動家や、フランコプロヴァンス語の研究者による、以前からの働きかけがあった。

なお、フランコプロヴァンス語はイタリアでは 1999 年に制定された「歴史的言語マイノリティ保護法」で認知されている。また、スイスではオイル語の地域を含むフランス語圏の方言とみなされてきたが、2018 年に欧州地域言語少数言語憲章の保護対象となる言語に認知された。

1.2. ブレス地方

言語学的に設定され、複数の歴史・社会的一体性を持つ地域から成るフランコプロヴァンス語圏のなかで、本稿ではフランスのブレス地方に焦点を当てる。ブレス地方は、フランコプロヴァンス語圏北西部のオイル語との境界地域に位置する(図1を参照)。ブレス地方と呼ばれる地域は隣接するオイル語圏にも広がるが、ここではフランコプロヴァンス語圏に含まれる地域を対象とする。この地域は、それが含まれる県の名前から「アンのブレス (Bresse de l'Ain)」、あるいは歴史的にサヴォワ公国の一部だった時期があることから「サヴォワのブレス (Bresse savoyarde)」と呼ばれる⁷。東西に約 40km、南北に約 40km に広がる平野で、中心都市はブル・カン・ブレス (Bourg-en-Bresse) である。

アン県はフランスのフランコプロヴァンス語圏でサヴォワの二つの県と並び、フランコプロヴァンス語の状況が比較的良いと言われる (Bert & Martin 2013: 494)。アン県のなかでフランコプロヴァンス語が維持されているのがブレス地方である。その要因は複合的であるが、ブレス地方でしばしば指摘されるのが地理的要因である。平野部にあるものの、粘土質の水はけの悪い土壌で、外部からの人々の往来が妨げられていたために、地域独自の文化や言語が保たれたと言われる (Maison de Pays en Bresse 1995: 9–10)。豊かな地域ではなく、周囲との往来も限られ、近代化が遅れたことが逆に、伝統的な暮らしや文化、言語が維持される要因となったのである。それらが地域的アイデンティティと結びつき、近代化により地域社会が変容するなかで、伝統文化を継承するフォークロア団体の活動が活発に行われてきた。ブレス地方でもフランコプロヴァンス語の話者は減少し、使用されることが少なくなっているが、一方で言語文化団体等の活動が進められている (Bert et al. 2013: 42, 52–53)。

フランスでは 1960 年代から 70 年代にかけて地域主義運動が高まり、フランコプロヴァンス語圏でもサヴォワ地方で、政治的運動と連動して言語運動が進展した (Pivot 2014: 223–224, 佐野彩 2020 など)。一方、リヨンを中心とする旧ローヌ・アルプ地域圏からの分離運動やフランスからの独立運動も見られたサヴォワとは異なり、ブレス地方を含むフランコプロヴァンス語圏西部地域では政治的運動は高まらず、地域の言語が表立って政治問題化することもなかった。そのなかでブレス地方は、言語文化団体の活動の歴史が長く、着実に活動が続けられてきた地域である。ただし、ブレス地方における言語の衰退とそれに抗するような近年の再活性化の動きをめぐって、地方紙の記事に現れる言説と言語の表象を分析したムーヌが指摘するように (Meune 2016: 107–108)、フランス語への言語シフトが進むなかで、言語運動の担い手も家庭や地域社会でフランコプロヴァンス語を身につけた、いわゆる「母語話者」世代から、話者は非常に限られるが、地域でのフランコプロヴァンス語の使用が少なくなってから生まれた「新話者 (néo-locuteur)」世代への移行期に差し掛かっており、言語運動は転換期を迎えつつある。

⁷ ただし、フランコプロヴァンス語圏に含まれるが、行政区画では隣接するソーヌ・エ・ロワール県に属している村が三つある。

2. 研究課題とデータ

本研究はブレス地方におけるフランコプロヴァンス語の再活性化について、言語状況の変遷と言語文化団体による活動の展開を資料やインタビューをもとに描き出し、その要因と現状、課題を考察するものである。ここでは「言語再活性化」を、(母語)話者を増やしてかつてのように言語が使われる状態にするといった、過去の状態への回帰ではなく、世界を再カテゴリー化する社会的プロセス (Pivot 2014: 23, Costa 2010) と捉える。

データとしては、言語文化団体などの過去の出版物やウェブサイトなどの資料に見られる記述および関係者に対するインタビュー調査によって得られたデータを主に用いる。2012 年から 2023 年にかけて断続的にフィールドワークを実施し、言語文化団体の関係者等に対するインタビュー調査、言語文化団体の活動等の観察を行った。インタビュー調査は、フランス語による半構造化インタビューを一人または複数人に対して行い、言語使用、言語意識、言語文化団体の活動等について調査した。インタビュー協力者は 2022 年までの合計で 42 人であるが、大人数のグループ・インタビューに一度参加したという人から、複数回インタビューを重ねている人までいる。本稿でインタビューを引用した協力者 (表 1 を参照) は後者に含まれる。

表 1：インタビュー協力者のプロフィール (本稿で引用した人物)

	生年	性別	母語 (自身の認識に基づく申告)	出身の村と都市 (ブル・カン・ブレス) の直線距離	調査実施年
A	1946	男性	フランコプロヴァンス語・フランス語	北北東に約 13km (調査は主に C の村で実施)	2014, 2020, 2022, 2023
B	1941	男性	パトワ・フランス語	北北西に約 30km	2014, 2020, 2022, 2023
C	1933	男性	パトワ	北北東に約 10km	2014, 2020, 2022

3. ブレス地方における言語状況の変遷

3.1. 19 世紀

本章ではブレス地方におけるフランコプロヴァンス語からフランス語への言語シフトについて、時代を追って検討していく。フランスでは 19 世紀初頭、内務省統計局により、コクベール＝ド＝モンブレ (Coquebert de Montbret) 親子による全国的な言語調査が行われたが、その時点でのブレス地方が含まれるアン県からの報告は次のようであった。

(1) La langue françoise est la seule en usage dans ce département. A part quelques expressions locales, on la parle généralement assez bien ; [...] il est satisfaisant de voir que ce n'est pas sans succès.

Quant à l'habitant des campagnes de la Bresse, il parle un dialecte ou patois qui varie

sans cesse dans les différents points du département, et souvent même de commune à commune. (Bossi 1808: 318) ⁸

アン県ではフランス語のみが使われていたとされているが、ブレス地方の農村部では、場所によって異なる「方言あるいはパトワ」、つまりフランコプロヴァンス語が話されていたことが分かる。ただし、都市部でも完全にフランス語に移行していたということではないことも、フランス語を「概してかなり上手に話している」、「それ〔教育〕が成功していないわけではない」という記述から推察され、この調査が当時のフランスにおける国家アイデンティティ創出という文脈に置かれていること (Ködel 2014: 164) から、フランス語化が進んでいることが強調されていると考えられる。

しかし、19 世紀後半になると、さらに状況が変化していたことが、アン県のフランコプロヴァンス語で書かれた歌などを収集したル＝デュック (Le Duc) による以下の記述から窺える。

(2) Aujourd'hui, le français tend de plus en plus à se substituer au langage pittoresque de nos campagnes, qui fut aussi naguère celui de nos petites villes ; les expressions originales, qui en faisaient l'agrément, n'existeront bientôt plus. (Le Duc [1881] 1978: VIII) ⁹

ル＝デュックによれば、この時期には市街地のみならず農村部にもフランス語が浸透しつつあったことが分かる。ただし、以下で見るように二言語併用状況が続く。さらにル＝デュックが引用するように (Le Duc [1881] 1978: VIII)、フランコプロヴァンス語へのフランス語の影響が見られるなど、両言語間の混淆が見られたことも推察できる。

3.2. 20 世紀

このようにフランス語は 19 世紀の間に農村部にも浸透しはじめていたが、フランスのフランコプロヴァンス語圏で子どもの第 1 言語がフランス語になったのは 20 世紀初頭から 1930 年代にかけてであると言われる (Bert & Martin 2013: 491)。

次の引用は 1946 年生まれのインタビュー協力者 (協力者 A) が語ったものである。

(3) Mon père [...] à l'école, il parlait que le français, quoi. Ma mère [...] elle n'avait jamais

⁸ 「この県ではフランス語のみが使われている。いくつかの地域的表現を別にして、概してかなり上手に話している。〔……〕 それ〔教育〕が成功していないわけではないことが分かるのは満足できることである。

ブレスの田舎の住民については、県の様々な地点で、しばしば市町村によっても、絶えず異なる方言あるいはパトワを話している。」 (拙訳、以下同様)

⁹ 「今日、我々の田舎の精彩に富んだことば、少し前までは我々の小さな町のことばでもあったことばがフランス語にますます置き換わる傾向にある。そのことばを魅力的なものにしていた独特な表現がもうすぐなくなってしまうだろう。」

entendu un mot de français avant d'aller à l'école. [...] Entre eux, ils se sont toujours parlé que patois, mes parents. [...] A nous, ils parlaient français [...] On comprenait bien tout ce qu'ils disaient, bien sûr. (2014 年 5 月 27 日) ¹⁰

このインタビュー協力者の両親は 1900 年代生まれである。彼らの第 1 言語は「パトワ」で、フランス語は学校で身につける言語であった。両親は彼らの間では「パトワ」で話していたが、子どもたちにはフランス語を使い（第 1 子を除く（2023 年 3 月 14 日インタビュー）、子どもたちの第 1 言語はフランス語になった。ただし、子どもたちはこの世代によく見られるように、親などの上の世代が話していた「パトワ」も理解できており、さらにこのインタビュー協力者はのちに自らもこの言語を話すようになった¹¹。

次の引用は 1941 年生まれインタビュー協力者（協力者 B）が子ども時代の家庭での使用言語について語ったものである。上のインタビュー協力者よりもブール・カン・ブレスから距離のある村の出身である（表 1 を参照）。この地域は、主要な道路が通る協力者 C の村とその近隣の協力者 A の出身地がある地域や、ソヌ川に接するブレス地方西部地域よりも言語シフトの時期が遅かったと言われる。

(4) « Nous sommes la première génération à avoir parlé français d'une manière courante. »

« Mes frères aînés, entre eux, ne parlaient que patois. [...] Nous, les petits, on avait tendance à parler français. »

« C'était une période de transition. [...] les filles ne parlaient que français mais les garçons ne parlaient que patois. [...] mon père nous a toujours parlé patois mais ma mère nous parlait une fois français une fois patois. [...] Donc on a baigné là-dedans, moitié-moitié. [...]

Et puis, tous les gens qui venaient à la maison parlaient patois. » (2014 年 7 月 1 日・18 日)

12

¹⁰ 「父親は [...] 学校ではフランス語しか話していなかったよ。母親は [...] 学校に行くまで、フランス語は一言も聞いたことがなかった。[...] 親たちは、彼らの間ではいつもパトワしか話さなかった。[...] 私たちにはフランス語を話していた [...] もちろん、彼らが言っていることは全部、よく分かっていた。」

¹¹ なお、表 1 にあるように、このインタビュー協力者は「フランコプロヴァンス語」を母語の一つに含めている（調査票の“langue(s) maternelle(s)”を問う項目への回答（2020 年 3 月 4 日））。

¹² 「私たちは流暢にフランス語を話した最初の世代である。」

「年上の兄弟は彼らの間ではパトワしか話していなかった。[...] 私たち、小さい子たちは、フランス語を話す傾向があった。」

「移行期だった。[...] 女の子はフランス語しか話していなかったが、男の子はパトワしか話していなかった。[...] 父親はいつも私たちにパトワで話したが、母親はあるときはフランス語、あるときはパトワで私たちに話していた。[...] だから私たちは、半々でそのなかに浸か

このインタビュー協力者は、まさに家庭の言語の移行期に子ども時代を過ごし、フランス語も「パトワ」も日常的に使われる環境で育っている。兄弟でも年齢が上の子どもたちは「パトワ」、インタビュー協力者を含む年下の子どもたちはフランス語を話す傾向にあり、男女差もあった。

このように 1940 年代には、子どもの第 1 言語は概してフランス語に移行しつつあったが、フランコプロヴァンス語も家庭や周囲の大人の間で使われており、これらの事例からは子どもたちもフランコプロヴァンス語を少なくとも理解していたことが分かる。徐々に変化していた地域社会での言語使用が大きく変化するのは第二次世界大戦後である。インタビュー協力者 C (1933 年生まれ) は、とりわけ輸送手段の発達により人々の移動が活発になり、フランス語を使う人々との接触が増えたことをその要因として挙げた (2022 年 8 月 31 日)。とはいえ、次のインタビューの引用からは、インタビュー協力者が暮らす地域では、1970 年代頃までは高齢の世代の間でフランコプロヴァンス語の日常的な使用が見られたことが窺える。

(5) à la sortie de la messe de dimanche, par exemple, [...] ils allaient au bistrot, [...] ils parlaient tous patois, quoi. Jusqu'à [...] jusqu'à soixante-dix par là. (協力者 A、2014 年 5 月 27 日) ¹³

(6) ça a duré jusqu'aux années [...] jusqu'aux années soixante-dix encore, c'était encore, oui, facile, hein. [...] Les gens qui avaient soixante-dix, quatre-vingts ans ces années-là, ils se rencontraient dans le village, ils parlaient patois [...] (協力者 C、2014 年 6 月 3 日)

¹⁴

(7) Ici, [...] en 1980, tous les conseils municipaux se faisaient encore en patois. [...] Parce que c'était tous des anciens cultivateurs, des anciens paysans et ils parlaient toujours patois entre eux naturellement. (協力者 B、2014 年 7 月 1 日) ¹⁵

地域社会で広く二言語が使用されていた時期には、一つの会話のなかでも、参加者によって用いる言語が異なったり、途中で会話の言語が切り替わることもあったという (2023 年 3 月 14 日インタビュー)。

そしてその後、日常的にフランコプロヴァンス語を使っていた当時の高齢の世代の人

っていた。〔……〕

それから、家に来ていた人々はみんな、パトワを話していた。」

¹³ 「例えば、日曜のミサの終わりに、〔……〕 彼らはビストロに行って、〔……〕 みんなパトワを話していたよ。1970 年ぐらいまで。」

¹⁴ 「それは続いていた 〔……〕 70 年代まではまだ、はい、簡単だったよ。〔……〕 当時、70 歳、80 歳だった人々は、村で会えば、パトワを話していた 〔……〕」

¹⁵ 「ここでは、〔……〕 1980 年には、すべての村議会はまだパトワで行われていた。〔……〕 なぜならみな元耕作者、元農民で、彼らの間では自然にいつもパトワを話していたからだ。」

が少なくなると、フランコプロヴァンス語の使用は非常に限定的になる。フランコプロヴァンス語は、互いに話者であることを知っており、フランコプロヴァンス語を用いる間柄として互いを認識している限られた話者の間だけで使われる言語になっていった。

3.3. 現在

現在、フランコプロヴァンス語は、村の商店や市場などの公的な空間ではほぼ耳にすることがなくなり、兄弟などの近い人の中での私的な空間での使用に限られるようになっていく（Bert et al. 2013: 42）。フランコプロヴァンス語の団体での会話を含め、コミュニケーション手段として用いられる言語はほぼフランス語である。ただし、新型コロナウイルスの影響で言語文化団体の活動が休止したことによってフランコプロヴァンス語を使用する機会が減るなど（2022年8月18日インタビュー）、言語文化団体がフランコプロヴァンス語を使用する場となっていることも窺える。

教育運動が進むフランスのほかの地域言語とは異なり、ブレス地方におけるフランコプロヴァンス語は、地域学習の一環として言語文化団体が学校で行う出張授業などは行われてきたものの、教科としてのフランコプロヴァンス語の教育は行われてこなかった¹⁶。一方で、言語文化団体も役割を果たしており、団体の活動に参加して子どもの頃に聞いていたフランコプロヴァンス語を話すようになった例や、数は少ないがフランコプロヴァンス語を学習している若い世代の人もある。マス・メディアの分野では、フランコプロヴァンス語のみの番組や放送局はないが、ローカル・ラジオ局で10分程度のフランス語とフランコプロヴァンス語の対訳の番組が放送されている（2週間に一本のペースで制作され、二つの局で計6回放送）。言語の存在を可視化する二言語表示については、二言語表示がなされているエコ・ミュージアムがあるが、多くの人が目にする街路名や市町村名の標識などの二言語表示は実現していない。

このように、フランコプロヴァンス語の使用は見られるものの、フランコプロヴァンス語を見聞きする場・機会は非常に限定的になっているのが現状である。フランコプロヴァンス語からフランス語への言語シフトは、都市部から農村部へ、学校教育の普及や交通網・手段の発達、さらに農業の機械化による農村社会の変動と人口の流出¹⁷などに伴って進んだ。地域住民全体で使われる言語から、主に年齢層やジェンダー（上の世代や男性がフランコプロヴァンス語を使う傾向にあった）、ドメイン（学校ではフランス語が使われるのに対して、農業関係の仕事場などではフランコプロヴァンス語が使われることが多かった）によって言語が選択される時期を経て、現在では言語再活性化の文脈での使用が中心になりつつある。ただし現在も、言語再活性化の文脈以外で日常的に使用される言語としてのフランコプロヴァンス語とフランス語の二言語使用も一部の話者に

¹⁶ フランスのフランコプロヴァンス語圏ではサヴォワ地方で、かなり限定的ではあるがフランコプロヴァンス語の教育が行われてきた。2021年末の国民教育省による認知を受け、学校教育への漸進的な導入に向けて研究者や運動家が活動を進めているところである。

¹⁷ インタビュー協力者にも、上の世代や兄弟と異なり、学業や就職に伴い、村を離れた人がいる。

よって続いている（2023年3月13日インタビュー）。

4. ブレス地方における言語再活性化

4.1. 言語文化団体の活動の展開

前章で検討したように、ブレス地方ではフランス語化が進んだが、一方で言語文化団体等による活動が展開されるようになる。本節では言語運動の展開と言語文化団体の活動の目的、フランコプロヴァンス語に対する意識を検討する。

まず、先駆的な活動とみなされているのが「ブレス農村大学 (Université rurale bressane)」である。オイル語の地域を中心とするブレス地方北部の地元知識人の団体であるが、1970年代後半から80年代にかけて、パトワ部門 (atelier patois) が「パトワ」の調査活動を行った。機関誌¹⁸では次のように述べられている。

(8) Nous n'aurons pas non plus la prétention de vouloir perpétuer un langage en voie de disparition, [...]

Les recherches que nous avons menées [...], nous avaient montré que cette culture méprisée, occultée, reléguée au dernier rang depuis la scolarisation complète [...] n'était pas morte. Et comme c'est le cas dans d'autres régions de France, les gens [...] pouvaient prendre conscience qu'ils étaient les dépositaires d'un savoir, d'une culture à préserver, à sauver de l'oubli, [...] (Barthélemy 1978: s.p.) ¹⁹

ここで地域の言語は、消滅していくものであるものの、「保護され、忘却から救われるべき知、文化」とみなされており、調査・記録が進められた。

現在まで続く言語文化団体の活動が始まるのは1980年代後半である。サン・テティエンヌ・デュ・ボワ (Saint-Etienne-du-Bois、1988年)、ヴィリア (Viriat、1990年代前半頃)、サン・トリヴィエ・ド・クルト (Saint-Trivier-de-Courtes、1993年)、マンジア (Manziat、1999年頃)、ポン・ド・ヴェル (Pont-de-Veyle、2005年)、コリニー (Coligny、2013年)、サン・ドニ・レ・ブール (Saint-Denis-lès-Bourg、2010年代後半) など、各地で活動が始まり、翻訳や学習会などの会合、語彙集などの編纂・出版、歌や寸劇の制作・上演といった活動が行われてきた。

これらの団体のなかで最も早く活動が始まったのがサン・テティエンヌ・デュ・ボワ村のパトワ話者のグループである。古い家屋などを移築したエコ・ミュージアム「ブレ

¹⁸ 1978年から84年にかけて、パトワ部門の機関誌が計9冊、出版されている。

¹⁹ 「我々は消滅しつつあることばを永久にとどめたいという野心も持たないだろう〔……〕我々が進めた調査では〔……〕学校教育の完全な普及以来、軽蔑され、隠蔽され、最下位に貶められた文化が死んでいなかったことが示されていた。そして、フランスのほかの地域におけるように、〔……〕人々は、保護され、忘却から救われるべき知、文化を託されていることを自覚できた。」

ス地方の家 (Maison de Pays en Bresse)」の傘下にある。1996 年に語彙集 *Qu'elle était riche notre Langue !: le patois bressan de Saint Etienne du Bois* (『私たちの言語はなんと豊かだったのかーサン・テティエンヌ・デュ・ボワのブレス地方のパトワ』) を出版したが、編纂に協力した言語学者マルタンは、序文で団体の活動の始まりについて次のように述べた。

(9) Les membres de cette association avaient le sentiment que la sauvegarde des pierres et des vieux outils n'était pas suffisante pour conserver l'essentiel du patrimoine légué par leurs ancêtres. Un groupe de patoisants s'est donc constitué et a décidé de rassembler les souvenirs disponibles pour laisser à la postérité une description précise de la vie traditionnelle en Bresse et établir un lexique du vocabulaire patois. (Martin 1996: 7) ²⁰

伝統文化が保存すべき「遺産」と捉えられており、「石造りの建物や古道具」のような有形の遺産だけでなく、伝統的な生活や言語などの無形の遺産の記録・継承に対しても意識が高まり、「パトワ」の語彙集やそのほかの出版物の編纂につながったことが分かる。

マンジヤ村の「文化遺産友の会 (Amis du patrimoine de Manziat)」が 2006 年に出版した語彙集 *Le patois de Manziat* (『マンジヤのパトワ』) の序文でも、会長のブロワイエが次のように書いている。

(10) Mais il était plus que temps : le nombre de patoisants ne cesse de diminuer et notre patois, insensiblement, perd de sa pureté et se francise. Oui, il était de notre devoir de garder un témoignage de la langue et de la culture de nos ancêtres, de les sauver de l'oubli qui les attend pour les transmettre aux générations futures.

La richesse de nos parlers régionaux n'est plus à démontrer mais il dommage [sic] que ce soit au moment où ils disparaissent que l'on s'en aperçoive. (Broyer 2006: s.p.) ²¹

「パトワ」の話者の減少と「パトワ」に対するフランス語の影響により、言語がそのまま忘却されることに対する危機意識から、また記録を未来の世代に継承するために、語彙集の編纂が行われたことが分かる。

²⁰ 「団体の会員は、石造りの建物や古道具の保護だけでは先祖から受け継がれた遺産の核心を保存するには不十分であると感じていた。したがって、パトワ話者のグループが組織され、ブレスの伝統的な暮らしの鮮明な記述を後世に残し、パトワの語彙辞典を作成するために、手に入れられる記憶を集めることにした。」

²¹ 「しかしまさに時宜にかなっていた。パトワ話者の数は減り続けており、私たちのパトワは知らぬ間に純粋さが失われ、フランス語化している。はい、未来の世代に継承するために、私たちの祖先の言語と文化のあかしを残し、それらを待ち受ける忘却から救い出すのは私たちがしなければいけないことだったのである。」

私たちの地域のことばの豊かさはもう証明しなくていいが、そのことに気づいたのがそれらが姿を消すときであったことは残念である。」

一方、2005年に創設されたボン・ド・ヴェル村の周辺地域で活動する「フェット・デュ・パトワ (Faites du patois)」はほかの団体と比べて野心的とも言える活動を行ってきた団体である。団体のウェブサイトには次のように書かれている。

(11) Pour faire revivre le patois bressan, pour retrouver nos racines, le mode de vie et d'activités de nos parents et grands-parents, identifier les métiers qui ont disparu ou ont évolué... ²²

この団体は「パトワ」の記録を残すだけでなく、歌や寸劇、朗読、ダンスを組み合わせた舞台の上演を通して「パトワをよみがえらせるために」、つまり現代において「パトワ」を再生し、居場所を創ろうと活動をしてきた。ただし、続く「私たちのルーツと親や祖父母の暮らしや営みの様式を思い出し、消え去ったり、変わっていった仕事を見つけ出すために」という引用に表れているように、「パトワ」は「過去」と結びつけられている。

4.2. 地域の文化的「遺産」としての言語

ブレス地方の言語文化団体の活動が始まったのは、言語シフトが進み、フランコプロヴァンス語を日常的に使う話者が高齢化して、村などで使われることが少なくなった1970年代後半、80年代以降である。ピヴォが「喪失の自覚 (conscience de perte)」(Pivot 2014: 5)と述べるように、言語が失われつつあることが意識されるようになったことが活動が開始された一つの要因として考えられる。さらに、フランス全体の動きとして1980年代、90年代には言語などの無形の文化も文化的「遺産 (patrimoine)」²³と捉えられるようになった (Di Méo 2007, Bert et al. 2013: 52, Pivot 2014: 5)。フランコプロヴァンス語圏における調査では、活動家自身は幼少期から「パトワ」に否定的な感情等を抱いたことはないというケースが見られたが、地域社会における否定的言語意識が肯定化するなかで、活動を始めることができたとも考えられる (佐野彩 2023: 317–318 など)。

しかし、「遺産化 (patrimonialisation)」されることが必ずしも言語の再活性化にプラスにならないことは、先行研究でも指摘されてきた。例えば、ブランシェは、「懐古趣味 (passéiste)」で「博物館化 (muséification)」、「フォークロア化 (folklorisation)」などと言われる遺産化と、言語政策や社会における言語の位置づけや使用、地位を変化させるような遺産化を区別している (Blanchet 2021: 146–147)。前者の遺産化のような、言語を

²² 「ブレスのパトワをよみがえらせるために、私たちのルーツと親や祖父母の暮らしや営みの様式を思い出し、消え去ったり、変わっていった仕事を見つけ出すために」

²³ “patrimoine”の訳語として、「過去」を連想しやすい「遺産」よりも、現在も機能するものであるというニュアンスが示される「資産」なども考えられるが、ユネスコの「世界遺産」や「無形文化遺産」という概念が浸透するなかで、日本語では「遺産」という訳語が普及し、定着していること、言語が「文化遺産」と捉えられるようになる現象は、ユネスコの活動をはじめとする国際社会の潮流のなかで起きていることを考慮し、ここでは「遺産」という訳語を用いる。

現代の生活から切り離し、博物館でただ展示されているような“使われないもの”にしてしまうような遺産化は、言語の放棄、消滅につながるのである。また、ボワイエも、言語の“死”を受け入れる「無気力な遺産化 (*patrimonialisation atone*)」と「動的（であり創造的）な遺産化 (*patrimonialisation dynamique(et créative)*)」を区別している（Boyer 2021: 56-57）。後者が、言語が使われなくなった領域で新たな言語使用を生み出すような動的な遺産化であるのに対して、前者は言語をそのまま消滅させるような遺産化であるとされる。このようにそれぞれ二つの「遺産化」が区別されている。

ブレス地方で行われてきたフランコプロヴァンス語の活動では、概してフランコプロヴァンス語は「過去」と結びつけられ、ムースが「過去の姿に固定化されたブレスーパトワを話し、カトリックを実践する一の復元 (*reconstituer une Bresse figée – patoisante et catholique pratiquante*)」（Meune 2016: 95）と表現するように、「過去」の記録あるいは再現にとどまる。言語文化団体の活動には伝統的な歌や踊りなどのフォークロアの活動が含まれ、寸劇などで再現されるのもフランコプロヴァンス語が日常的に話されていた過去の生活の場面であることが多い。さらに、言語純粹主義的態度も見られる（佐野彩 2023: 257-258 など）。フランコプロヴァンス語は「過去」の事物と結びつけられ、これらを知らない「新話者」は「パトワ」を身につけられないと（とりわけ「パトワ」を幼少期から話す）「母語話者」などにみなされ、さらに言語意識の上で「過去」の姿に固定化された「パトワ」からの言語変化は逸脱とみなされることがある。

このようにブレス地方の言語文化団体におけるフランコプロヴァンス語は「過去」と結びつけられ、過去の記録・再現に概してとどまることから、現状では言語の衰退を乗り越えるような「遺産化」とまでは言えないと考えられる。こうした活動自体は意義あるものであるものの、フォークロア化された言語・文化は若い世代の関心を概してあまり惹くものではなく（佐野彩 2023: 259-260）、「過去」のものとみなされる言語をどのように現代社会のなかに位置づけるかということが、一部の「母語話者」に近い世代（自らは幼少期にフランコプロヴァンス語を話していなかったが、周囲でそれが話されていた世代）の言語文化団体関係者には課題として認識されていると思われる（2022年8月30日インフォーマル・インタビューなど）。ただし、新たな試みも見られる。例えば『タンタンの冒険』などのバンド・デシネ（漫画）がブレス地方のフランコプロヴァンス語に翻訳されたり²⁴、前述のラジオ番組では時事的なトピックが扱われることが多くなっている。また、散発的ではあるものの若い世代の音楽家と言語文化団体の話者との協働や観光分野での取り組みなども行われている。こうした一つ一つの活動の蓄積がフランコプロヴァンス語の現代のブレス地方における機能・役割の創出につながると考える²⁵。

²⁴ 『カスタフィオーレ夫人の宝石 (Les Bijoux de la Castafiore)』のブレス語／ブレスのフランコプロヴァンス語 (*bressan / francoprovençal bressan*) 版 (*Lé pègelyon de la Castafiore*, 2006年)のほか、2007年、2012年にも出版された。

²⁵ 国民教育省による地域言語としての認知を受けて、研究者の主導で検討が進められている学校教育へのフランコプロヴァンス語教育の導入において、どのような位置づけの言語として導入

4.3. 「パトワ」と「フランコプロヴァンス語」

ブレス地方の言語文化団体で活動する人々は概して自分たちの言語を「パトワ」と呼び、「ブレスのパトワ (patois bressan)」、さらに言えば言語文化団体のある村とその周辺の「パトワ」の活動を行ってきた。しかし、ブレス地方は言語学的には「フランコプロヴァンス語」圏の一部を成している。活動が進展するなかで「パトワ」が「フランコプロヴァンス語」と名づけられている、国・地方の境界を越える言語であることが、団体のメンバーに知られるようになった²⁶。インタビュー協力者の一人は次のように語った。

(13) maintenant, moi, je parle plus facilement aussi que... on est pas que nous, tous seuls isolés, mais qu'on fait partie d'une zone du francoprovençal et que... et qu'on a cette même langue, cette même origine, même... et que... on se comprend même avec d'autres. Donc notre patois, il est pas que chez nous, quoi. (協力者 A、2020 年 3 月 4 日) ²⁷

フランスで「パトワ」という概念が歴史的に形成されていくなかで、「パトワ」は「言語」であるフランス語に対して、非「言語」とされ、フランス革命期には国民へのフランス語普及のためにその存在が否定されただけでなく、それに対抗する側からもそのことばが「パトワ」であることが否定されることになった (佐野直子 2020)。フランスの歴史的文脈では、「パトワ」という名称と「パトワ」であることは、言語運動において否定されるべきものになると考えられる。ブレス地方の言語文化団体関係者にも、「パトワ」が「フランコプロヴァンス語」という国境をも越える「言語」であると言語学的に認知されていることは、言語の再評価や継承にとって重要であると捉えられることが多くある (佐野彩 2023: 345)。ところが、ブレス地方の言語運動で多く用いられるのは「パトワ」という名称である²⁸。自分たちのことばはまず「パトワ」であり、その「パトワ」が地方・国の境界を越える「フランコプロヴァンス語」に属しているという言語意識の二

されるか (伝統文化との関係など) という点にも注目できる。なお、学校での教育においても、現場ではそれぞれの地域変種が導入される可能性が高いと思われる。

²⁶ 草創期の言語学者との協働から言語文化団体関係者に知られるようになったり、国際フランコプロヴァンス語祭への参加がきっかけになっている (Sano, A 2021: 66)。

²⁷ 「今、私は、もっとたやすく、私たちだけではない、ただ私たちだけで孤立しているのではない、フランコプロヴァンス語の地域に属していて、この同じ言語を共有している、そして、ほかの人々と通じ合うことだってできるとも言える。だから、私たちのパトワは、自分たちの地域だけのものではないんだ。」

²⁸ ブレス地方の言語文化団体関係者の「パトワ」に対する意識について、インタビュー協力者の表現では、“sous-langue” (「下位の言語」、2020 年 3 月 4 日) という表現が見られた。このインタビュー協力者の見解では「パトワ」は「言語」であるが、フランス語のような「言語」とも区別され、言語学的な意味での「言語」とフランスの政治・社会的文脈での「言語」の間で、ある種の“ジレンマ”が見受けられた。一方、「言語」ではないとし、「方言 (dialecte)」とみなすインタビュー協力者もいる (2020 年 3 月 12 日)。

重性が言語文化団体関係者などの間に浸透しつつある。

5. 考察と展望

ブレス地方の調査地域では 1940 年代には子どもがフランス語を第 1 言語とするようになり、1970 年代を過ぎるとフランコプロヴァンス語は地域社会で使われることが非常に限られるようになった。フランコプロヴァンス語が失われつつあることが意識されるようになり、また一方で地域言語を地域の文化的「遺産」と捉える社会的潮流のなかで、言語文化団体の活動が開始されたと考えられる。しかし、ブレス地方におけるフランコプロヴァンス語の活動では、フランコプロヴァンス語は「過去」と結びつけられることが多く、概して「過去」の言語とみなされており、どのように言語を消滅に向かわせる「遺産化」を乗り越えるかが課題である。そのためには、フランス語が主に使われる地域社会において、フランコプロヴァンス語が使われる新たな使用領域や、フランコプロヴァンス語の機能・役割が創出される必要がある。

「パトワ」が「フランコプロヴァンス語」でもあるという言語意識の二重性は、名称の使い分けに表れており、ブレス地方の言語運動で「フランコプロヴァンス語」が使われるのは「国際フランコプロヴァンス語祭」²⁹のような地方や国の境界を越える文脈や「パトワ」の言語学的位置づけを示す場合である。しかし、言語意識の二重性は、「パトワ」がローカルな文脈と、地方あるいはさらに国の境界を越える文脈をつなぐものになり得るという点で、言語運動において、また可能性としては地域の活性化といった観点からも重要性を持ち、フランコプロヴァンス語の新たな役割を創出する可能性がある。言語運動については、近年、2013 年に設立され、サヴォワ地方を除くフランスのフランコプロヴァンス語圏の諸地方の団体が加盟する「フランコプロヴァンス語西部連盟 (Fédération Ouest du Francoprovençal)」の枠での連携が進められている。ブレス地方の境界を越える言語境界意識の醸成や人的交流、活動の策定という面だけでなく、言語使用の面でも、断片的なものではあるが集会での発話 (2022 年 8 月 27 日、2023 年 3 月 24 日観察)、メールによるコミュニケーションでの使用、各地の「パトワ」による記事が掲載される会報などにより、地方の境界を越えてフランコプロヴァンス語を使用する機会が創出されていることが窺える³⁰。

今後はブレス地方におけるフランコプロヴァンス語とフランス語の二言語使用状況の

²⁹ 三つの国のフランコプロヴァンス語圏の持ち回りで、原則年 1 回、開催されてきた言語祭で、三つの国から話者が集まり、交流する場になっている。2012 年にはブレス地方で開催された。

³⁰ なお、本稿はフランコプロヴァンス語圏における言語運動の全体像を示すものではない。例えば、サヴォワ地方では言語運動家の世代交代がブレス地方よりも早く進み、「新話者」世代が言語運動の中心的立場を担うようになってきている。そのなかで、フランコプロヴァンス語圏の一体性を重視する「アルピタン語」の運動家がサヴォワ地方で進められてきた言語運動に関わるようになってきていることが窺われる。このようなほかの地域の言語運動における変化や、将来的にブレス地方の話者を含む「新話者」世代の話者間の超地域的なつながりが生まれるとすれば、それらが今後のブレス地方における言語再活性化に影響することも考えられるだろう。

変遷と現状についてより具体的に検討するとともに、言語文化団体および関係するセクター（文化、観光、ローカル・ビジネス、教育、ローカル・メディアなど）におけるフランコプロヴァンス語の位置づけと具体的な言語使用を調査し、どのようなフランコプロヴァンス語をどのような形で継承・再活性化しようとしているのか、新たな言語使用の場や機能・役割を生み出しているか、地域の資源としてどのように捉えられているのか、「パトワ」がブレス地方の境界を越える「フランコプロヴァンス語」であることはどのように位置づけられるのかといった観点から、ブレス地方の「パトワ」／「フランコプロヴァンス語」の再活性化について、その実態を明らかにしていくことが課題である。

参考文献

- Ascoli, Graziadio Isaia ([1874] 1878) « Schizzi franco-provenzali », *Archivio glottologico italiano*, 3, pp.61–120.
- Barthélemy, Albert (1978) « L'atelier patois - Session 1977 », Université rurale bressane - Atelier patois, *Bulletin*, 1.
- Bert, Michel, James Costa & Jean-Baptiste Martin (2009) « Etude FORA: francoprovençal et occitan en Rhône-Alpes », <http://www.ddl.cnrs.fr/led-tdr/pageweb/sources/FORA_rapp.pdf> [2023.3.30].
- Bert, Michel, François Dauvergne, Claudine Fréchet, Jean-Pierre Gerfaud, Jean-Baptiste Martin, Manuel Meune, Bénédicte Pivot, Noël Poncet & Frédéric Thouny (2013) *Parler patois: le francoprovençal dans l'Ain*, Bourg-en-Bresse: Patrimoine des Pays de l'Ain.
- Bert, Michel & Jean-Baptiste Martin (2013) « Le francoprovençal », Georg Kremnitz dir., *Histoire sociale des langues de France*, Rennes: Presses universitaires de Rennes, pp.489–501.
- Bichurina, Natalia (2018) « Francoprovençal as social practice: comparative study in Italy, France and Switzerland », *International Journal of the Sociology of Language*, 249, pp.151–165, <<https://doi.org/10.1515/ijsl-2017-0044>> [2023.3.30].
- Blanchet, Philippe (2021) « Faire des langues un patrimoine ? : enjeux et problèmes au regard des langues dites « régionales » de France », Stéphane Olivesi & Anne-Claude Ambroise-Rendu dir., *Patrimoines et patrimonialisation: les inventions du capital historique (XIX^e–XX^e siècles)*, Fontaine: Presses universitaires de Grenoble, pp.127–152.
- Bossi, Giuseppe Aureliano Carlo (1808) *Statistique générale de la France, publiée par ordre de sa majesté l'empereur et roi, sur les Mémoires adressés au Ministre de l'Intérieur, par MM. les Préfets. Département de l' Ain*, Paris: Testu imprimeur de sa majesté, <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k85051q>> [2023.3.30].
- Boyer, Henri (2021) « Langue, Identité, Patrimoine. Sur quelques aspects de la *patrimonialisation* ethnosociolinguistique », Samira Moukrim, Carmen Alén Garabato, Henri Boyer & Hachem Jarmouni dir., *Langues et patrimoine culturel*, Paris: L'Harmattan, pp.49–63.
- Broyer, Maurice (2006) « Avant-propos », *Le patois de Manziat: glossaire patois-français français-patois*, Manziat: Amis du Patrimoine de Manziat.
- Costa, James (2010) *Revitalisation linguistique: discours, mythes et idéologies. Une approche critique de mouvements de revitalisation en Provence et en Ecosse*, Thèse de Doctorat, Université Stendhal Grenoble 3, <<https://shs.hal.science/tel-00625691/>> [2023.3.30].
- Di Méo, Guy (2007) « Processus de patrimonialisation et construction des territoires », Colloque « Patrimoine et industrie en Poitou-Charentes: connaître pour valoriser », septembre 2007, Poitiers-Châtelleraut, France, pp.87–109, <<https://shs.hal.science/halshs-00281934>> [2023.3.30].
- Ködel, Sven (2014) « L'Enquête Coquebert de Montbret (1806-1812) sur les langues et dialectes de France et la représentation de l'espace linguistique français sous le Premier Empire (2013) », *Encyclo. Revue de l'école doctorale Sciences des Sociétés ED 624*, 4, pp.163–164, <<https://hal-univ->

paris.archives-ouvertes.fr/hal-01017886> [2023.3.30].

Le Duc, Philibert ([1881] 1978) *Chansons et lettres patoises bressanes, bugesiennes et dombistes, avec une étude sur le patois du pays de Gex*, Marseille: Laffitte reprints.

Maison de Pays en Bresse (1995) *C'était hier: mémoire de la vie bressane par les gens du pays*, Saint-Etienne-du-Bois: Maison de Pays en Bresse.

Martin, Jean-Baptiste (1996) « Introduction », Les Gens du Pays (sous la direction scientifique de Jean-Baptiste Martin), *Qu'elle était riche notre Langue !: le patois bressan de Saint Etienne du Bois*, Saint-Etienne-du-Bois: Maison de Pays en Bresse, pp.5–8.

Meune, Manuel (2016) « Signe des temps ou chant du cygne ? Entre enjeux de représentations et de graphie: la revitalisation du francoprovençal bressan au miroir de la presse régionale », *Actes de la conférence annuelle sur l'activité scientifique du Centre d'études francoprovençales*, Aoste: Région Autonome Vallée d'Aoste, pp.87–111, <https://www.centre-etudes-francoprovencales.eu/d/633/actes-web-2015_911.pdf> [2023.3.30].

Pivot, Bénédicte (2014) *Revitalisation de langues postvernaculaires: le francoprovençal en Rhône-Alpes et le rama au Nicaragua*, Thèse de Doctorat, Université Lumière Lyon 2, <https://www.academia.edu/7513400/Revitalisation_de_langues_postvernaculaires_le_francoprovençal_en_Rhône-Alpes_et_le_rama_au_Nicaragua> [2023.3.30].

佐野彩 (2020) 「フランスのサヴォワ地方における言語運動とフランコプロヴァンス語の捉えかた—1970年代から90年代初頭を中心に—」『言語社会』14, pp.52(391)–65(378).

Sano, Aya (2021) « Revitalisation du francoprovençal et conscience linguistique dans l'aire francoprovençale française », *Nouvelles du Centre d'études francoprovençales "René Willien"*, 78, pp.55–71.

佐野彩 (2023) 『「フランコプロヴァンス語」は存在するか—フランス・イタリア・スイスの国境を越える言語の再活性化と言語意識：フランスの地域を中心に』三元社.

佐野直子 (2020) 「フランス語圏における「パトワ」概念の歴史的変遷と「言語」」『ロマンス語研究』53, pp.103–112.

Zulato, Alessia, Jonathan Kasstan & Naomi Nagy (2018) « An Overview of Francoprovençal Vitality in Europe and North America », *International Journal of the Sociology of Language*, 249, pp.11–29, <<https://www.degruyter.com/document/doi/10.1515/ijsl-2017-0038/html>> [2023.3.30].

ウェブサイト

Faites du Patois, « Accueil du blog », Grièges: Faites du Patois, <<http://faitesdupatois.canalblog.com>> [2023.3.30].

本研究は、JSPS 科研費 21J00775 (「フランコプロヴァンス語の再活性化における言語使用についての包括的研究」特別研究員奨励費) の研究成果の一部である。

現地調査の一部は、JSPS 科研費 13J06070 (「危機言語の維持・再活性化と言語名、言語意識—「フランコプロヴァンス語」を巡って」特別研究員奨励費)、JSPS 科研費 18H00668 (「フランス語圏における「パトワ(patois)」概念についての歴史・地理横断的研究」基盤研究(B)、代表：佐野直子) の助成を受けた。

(さの あや / 日本学術振興会 (上智大学))